

G・H・ミードの社会的自我論における複数性

水上 瑞咲

本研究はシンボリック相互作用論の始祖とされる G・H・ミードを、「内的複数性」の議論に関わる重要な思想家としてとらえることを目的とする。「内的複数性」とは自身が公共における思想の最新の問題と考える概念である。研究内容としては、ミードの初期直筆論文『社会的自我』の分析と、二次文献を利用したミード理論における他者像の検討を行う。

第 2 章・第 1 節『社会的自我』の分析では、「I と Me」概念がもたれている誤解を解く。ミードの狙いは自我を再帰の営みとして述べ直すことにある。自我の社会的に規定された部分を「Me」とし、それに応答する個人としての部分を「I」とするような自己役割分担の理論と理解することは先ほどの再帰的な自我の構造理解とは異なり、ミードの目的をとらえていないために不十分であるためである。「主我」と「客我」は役割を自明のものとして割り切ることはできない。「I と Me」が役割分担ではなく、自我の再帰性を軸とする概念であることを、複雑に相互連関をする「主我」「客我」の概念の構造分析によって整理して示す。ミードによれば、自己の行為の意味は行われた行為に対する内的な反応によって理解することができる。内的な反応とは、他者の反応を意識に還元したものと、自分の行為を示唆する内省的反応のことである。ミードの社会的自我論の問題意識は、準拠集団内にて習慣的行為を行う自我が、いかにして間集団的なコミュニケーションにおいて自我の再構成をおこなうかということであった。自我の再構成は、問題状況における価値観の異なる他者の役割を取得することで成される。

第 2 章・第 2 節では「行為の連関」というミード理論における独自の他者像の分析を行う。準拠集団において取得される「一般化された他者」の役割とは役割の合成ではなく、行為の連関として、他者の複数の役割を人は取得している。この行為の連関の拡大が、分業社会という社会的行為を行う体系を示すのである。「パースペクティブの重層」である自然において、生物は同じ環境に対して異なる関係性を折り重なって結んでいる。パースペクティブが異なれば対象に対してもつ反応も異なる。人は集団で複雑な連関をもって社会的行為を行う。このことは断片化した生

替えは、個人が社会活動に関与する他の集団成員の態度をどれだけ取得するかにかかっている。分業社会による異なるパースペクティブとの関係から自分の行為を捉えかえし、意味を再構成することが、ミードにおける間集団コミュニケーションの意味であった。

社会的行為の編成替えとはつまり、社会的対立が状況の再構成に向かうことを指す。状況の再構成において、それまでの個別パースペクティブは新しい共通パースペクティブに適応していく。しかしそれは、パースペクティブの交差による行為の立ちかえりから妥当性を理解したうえのことである。個別パースペクティブと共通パースペクティブの衝突は、共通パースペクティブにも再帰性をもたらす。そのため差異ある個人パースペクティブによって共通パースペクティブは革新的な変化を迫られることがあるであろう。

第3章では「自己の再帰性」、「行為の連関としての他者」、「社会的行為の編成替えの可能性」といったミード独自の内的複数性の思想は現実の問題状況のなかでどのように実践されたかを検討する。第1節に取り上げた「学校」や「工場」という場は、ミード理論の特徴が発揮されやすい活動舞台であった。職業教育の導入についての活動から、二元論的な対立を避け複数性の維持を目指すミードの討議実践を把握した。現実的な例において、二項対立では乗り越えられない生活者の問題を具体的に理解することができるであろう。

パースペクティブの交差と状況の再構成は規範的目的に留まらない意義を持っている。

第3章・第2節では大戦におけるミードの言論の批判点を検討した。大戦におけるミードの言論はアメリカを民主主義の象徴とする楽観的な想定のために、対外政策への批判を見逃し、内的な差異を消失させてしまう民主主義のイデオロギー的状态を生み出してしまった。これは、ミード自身のミード理論の不徹底によるものであった。またミードの社会的自我論は大戦後の発展の中で、個人の自己実現意識がナショナリズムに陥らずに人々と連帯するための議論を持ち合わせるようになる。ミード理論は社会的行為の編成替えの際に、複数性をいかに維持することができるかという問題意識をもっている。そのために大戦後のナショナリズム批判は当然議論の範疇となるのである。

ミードの理論的特徴をふまえ、公共における内的複数性の議論に対してミードがもたらす視座を明らかにしたい。